

天若湖アートプロジェクトの目指すもの（2011年度改定）

日吉ダムは、桂川流域の治水と京阪神地域での水需要の増大を受けて、平成10年（1998）に完成したばかりの新しいダムです。「地域に開かれたダム」のコンセプトのもと、温泉等多くの施設が建設され、多くの来訪者に利用されています。平成16年（2004）には、湖面利用のルールも定められ、新しい公共空間である湖面が幅広く市民に開放されることとなりました。

しかし、新しい水面である天若湖は、地域の歴史文化に根ざした人との関わりを持っていません。バス釣りに代表される釣り客のボートが見られる他には、湖面を利用する人はあまり見られません。

かつてこの地には、桂川とともに生きた集落がありました。昭和63年（1988）に日吉町によって編まれた「日吉ダム水没地区文化財調査報告書」は、今は平坦な水面となっているこの場所に、豊かな生活文化をもった村があったことを伝えています。そして、地域の自然とともにあったその集落が湖底に消えたのは、比較的最近のことなのです。

わたしたちは、この真新しい場所に昔に負けないくらいの生き生きとした息吹を取り戻したい、と考えます。そして、そのためには、地域の方々の思いとダムの意味を、川とのつきあい方や考え方も異なる流域のさまざまな人々が知り、共有しながら、この場所に触れていくほかないのだと考えます。

しかし上下流の人々の間をつなぐには、ことばだけでは不十分です。その環境を生きてきた人々の実感と、それを消費してきた人々の一般論とは、それらがことばにされる時、すれちがってしまうことが多いのです。それを越えるものとして、私たちはアートを見つけました。

アートは結論めいたものを示すものではありません。また地域の問題を解決するものでもありません。しかし、生きた時代やことば、属している集団や共同体を超えて問いかけます。それは社会に現れたり潜在したりしている、さまざまな課題に気づきを与え、同時に人々を繋いでいく力を持ちます。

天若湖アートプロジェクトは、風景とアートの力によって、水没地域、地元そして流域のそれぞれの人々が、ともにこの場所に触れ、地域固有の魅力や課題を感じ、それについて考える機会を創り出します。この経験は上流と下流との共感を創り出し、天若、日吉地域のみならず桂川流域、ひいては淀川流域全体の環境への、人々の意識を更新していくものと考えます。

アーティストだけでなく、むしろ市民自身が新しい天若湖の姿を生み出し、提示し続ける。そうしたかつてないアートのかたち、流域連携のかたちが、天若湖アートプロジェクトなのです。（2011年5月）

天若湖アートプロジェクト HP 内
「天若湖アートプロジェクトが目指すもの」より抜粋
<http://amawakaap.exblog.jp/15669500/>



それぞれの集落の特徴

宮村

竹林を持ち、竹製品の生産が盛んだった。天若地区でも入口に当たるこの地には居酒屋もあり、園部近辺でも屈指の産業村でありつつ、都会的な雰囲気も漂う集落でもあった。

世木林

現在は数 km 下流に移転されている、地域名にもなった「天稚（あまわか）神社」があった集落。農業林業が主産業の穏やかな村だった。

沢田

天若の中心地だったこの集落には、明治には天若小学校が開設され（昭和 33 年からは保育所）、近辺の子供たちが集まる場所であった。保育所前の大木は、夏季になると湖から枯れた頭をのぞかせる。

楽河

離村時には 9 軒のみであったが、少ないながらも仲が良く、和やかな村であった。薬師堂があり、その薬師如来坐像は現在、殿田の日ノ寺に移されている。

上世木

かつては、下流に木材を運搬する筏の集積基地として、問屋や宿屋が集まり栄えた集落。鮎取りも盛んで、山中の道を抜けて、京都市内まで鮎を運んだそうだ。

中村（スプリングスひよし近辺）：八幡神社を中心に賑わった集落。1月の厄除例祭などは亀岡や京都からも参拝者が多く訪れたそう。

小茅（上世木より東北の山中）：山の幸に恵まれた小さな集落。水没はしていないが、他集落と合わせて離村している。